

同時かつ大量に発生する要望の調整は、現地のスタッフだけでは対応しきれず、ボランティアセンターの運営には、全国から支援に駆けつけた豊富な経験を持つNPO団体などが当たっていました。ボランティアに参加する側も支援を求める側も、

が九九四棟、大規模半壊、一部損壊を含めると三万九〇〇棟を超え、電気、ガス、水道はもちろんのこと、道路の損壊、がけ崩れ、公共土木施設に甚大な被害を及ぼしました。今回の災害は、私たちに改めて地震の恐ろしさを見せ付けてとともに、近い将来発生が予想されている宮城県沖地震への備えを怠らないよう、警鐘を鳴らすものでした。

切に行われている印象でした。防災行政無線では定期的に住民に向けた情報が流され、また、市内にあるミニFM放送局と災害対策本部が連携して番組を放送することで、住民が情報を得やすいように対策が施されていました。三年前の地震の教訓に加え、原子力発電所を抱える自治体として非常時の対応が徹底していたことがうかがわれます。

本市では、防災行政無線が無い地域を抱えているので、消防団や自主防災組織と連携をとった情報の伝達や、停電時を想定した訓練が重要なことを再認識しました。

■非常食の備えは万全に

市街の様子は、どこを見ても地震のつめ跡が深く残っていました。国道ではひどい渋滞が起こり、車同士の衝突もたびたび目撃され、交通事故が多

## 地震の脅威

新潟県は三年前にも中越地震に見舞われましたが、今回の地震では、死者十一人、重軽傷者一八〇〇人を超す惨事となりました。住宅被害は全壊

⑤ 防災安全課 ☎5144

## 支援隊の見た被災地

支援隊は、柏崎市に到着してすぐ市の災害対策本部を訪れ、大崎市長の親書を手渡ししました。応対した市職員は、「三年前に大きな地震があったばかりで、まさか、またこれほどの地震が来るとは思わなかった」と悔しさをにじませていました。

市街の様子は、どこを見ても地震のつめ跡が深く残っていました。国道ではひどい渋滞が起こり、車同士の衝突もたびたび目撃され、交通事故が多

## ボランティアの力と課題

阪神淡路大震災以降、災害支援ボランティアの活躍が復興への大きな力として注目されてきました。今回の地震でも、発生から一時間以内に地元

の社会福祉協議会がボランティアセンターを立ち上げるなど、ここでも三年前の地震の教訓が生かされていました。ただ、発生からしばらくは余震の心配があることから、個人宅への派遣は行われず、ボランティアは限定的に受け入れられていました。

もう一度その在り方を考え直す時期に来ているようです。

自主防災組織のしつかりしている地域と、そうでない地域では、避難所でも大きな違いが見受けられました。救援物資の配送を受け持った支援隊員からは、「組織が機能している避難所に到着すると荷降ろしや個人への分配がスムーズでしたが、そうでない避難所では、支援者に頼りきりになるため、荷物が積みっぱなしになっているところもあった」という報告がありました。

被災地は、予想以上の被災でした。ボランティア活動では、お互いの思いやり、人となりのつながり、ネットワークの大切さを痛感し、災害時でも特別なことをするのはなく、日ごろ行っている福祉活動が重要だと感じました。

## 支援隊参加者の声

復旧支援を行い感じたことは、地域の人たちの団結力です。被災地は大変な状況でしたが、それでも地域の人たちで困難に立ち向かおうという姿が見られました。今回の経験を、本市の防災対策に生かしたいと思います。



第1次災害支援隊  
大崎市防災安全課  
高橋 直主 査



第2次災害支援隊  
大崎市社会福祉協議会地域福祉課  
久保 理子 さん

